

「しま Café」が紡ぐ、新たな島づくりの夢

－ 「とびしま未来協議会」による内発的地域づくりへの挑戦 －

呉尚浩

この夏、飛島（山形県酒田市）において、新たな交流・共創拠点「しま Café」がオープンし、7月中旬から9月下旬の開催期間に、延べ4241名（一日当たり平均、約62名）の利用者を記録した。

その名の通り、飲み物、スイーツや島ならではの食材を使った軽食を提供するお店だが、島めぐり窓口、島めぐりツアー、ギャラリー展示、観光イベントなどを行う「しまの家」（2008年度から公益大・飛島ふあんくらぶとNPOパートナーシップオフィスの共創で試験的に開設してきたもの）とセットで、観光・交流情報提供の拠点としての機能も併せ持っている。また、秋・冬期間には、島内三地区での映画上映会や移動Caféの実施など、島民向けの交流プログラムを予定している。

カフェは、高齢化によって「海の家」も閉じ、おみやげ店や食堂が営業を止めたり、縮小するなかで、島民からの希望もあり実現したもの。「港の雰囲気が明るくなり、賑わいが出てきた」「若者の姿が見えて活気が出てきた」との島内外からの良い評価の声が多く、テレビ・新聞などにも毎週のように取り上げられ、飛島の玄関口の新たな拠点となっている。

ところで、しまCaféは、島民、島の応援団（NPO、大学、市民団体など）、行政（酒田市、山形県）が「共に」島の未来を考える場として、昨年2011年5月に設立された「とびしま未来協議会」（以下、協議会）の島内におけるはじめての自主事業として実施された（山形県「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」に採択）。協議会が島の新たな公的な合意形成の場であるとすれば、しまCaféは島づくりの夢を語るサロンとしてインフォーマルな合意形成の場となることを企図している。

私たちは「地域住民の主体的な発想や行動を核とし、地域資源を持続可能な形で活かす」地域づくりのことを「内発的地域づくり」と呼んでいる。過疎・高齢化が進行し、地域の将来ビジョンを描き実行する力が弱まっている地域においては、アイデアを描き、推進するための新たな活動主体、もしくはそのネットワークが必要とされており、協議会においては住民の主体性を中心に置きながらも、応援団は共に汗を流すことが求められている。

そこで、協議会スタッフ（NPOパートナーシップオフィスに所属する公益大の学部・大学院卒業生や非常勤教員が中心的に活躍）を中心に、今年から導入された「緑のふるさと協力隊」の隊員、飛島をフィールドに活動・研究している県内大学の学生、卒業生や関係者が応援にかけつけ、カフェの担い手となってくれた。仮設のプレハブにオープンカフェという空間だが、「とび魚だしめんつゆ」を利用したアイスクリーム「とびうおバナナ」や、島の魚介類・野菜を使った「しまのカレー」、島の名産ごどいもを用いた「ごどいもバター」、島のお母さん直伝の「イカのにんにく焼」などのオリジナルメニューも好評で、観光客に喜ばれているだけでなく、島民や仕事での中長期の来島者の利用もあり、島づくり

のための夢を語り合う場としても役割を果たしはじめている。

さて、10月には、同じく協議会の事業として「幻の天保そば&とび魚だしそばつゆ」のセットも発売開始となった（酒田市観光おみやげ品開発助成事業に採択）。これらは、従来「幻の山形天保そば保存会」が取り組んできた「天保そば」（1998年に福島県大熊町の旧家から発見された江戸時代の天保時代のそばの種を、「幻の山形天保そば保存会」のメンバーの手で発芽に成功させ、他品種と交配しないように飛島で種子づくりをしているもの）と「とび魚だしプロジェクト」（東北公益文科大学、JA山形農工連、山形県漁協による連携）が開発、販売促進してきた「絶品とび魚だしめんつゆ」を新たにそば用に工夫したものを組み合わせて、「飛島の顔となるおみやげ品」として開発したものである。

今まで「島外」グループが地域資源の魅力を発見し、各々に取り組んでいたプロジェクトを新たに結びつけ、活かし、協議会の事業とすることで「島全体」の取り組みとなった（ちなみに、この「とび魚だしプロジェクト」の学生たちの活動は、「眠れる地域資源にスポットをあて、存在感あるものに仕立て上げ、島民を巻き込んでの活動で地域活性化に寄与していること」が評価され、今年9月に「輝けやまがた若者大賞」を受賞し、県知事から表彰された）。

そして、もうひとつの今年度の大きな事業は、離島振興計画策定に向けての島民の意見の集約である。島づくりの計画を定める離島振興計画は10年に一度策定されるものだが、先の計画づくりの際には公益大も参加し調査は実施したものの、住民の間で十分議論をしてまとめる機会はなかった。今回は、協議会と公益大の「とびしま未来研究会」が共創して、島民・帰省者・来島者向けにアンケートおよびヒアリング調査を実施し、合わせて島内各地区で「とびしまの未来を語る会」を複数回開催することで、市や県に対し協議会として計画に盛り込むべき重要項目を提案することができた。

また、飛島での島づくりの課題や取り組みを、現在国交省がとりまとめている「離島振興基本方針」策定へ活かすために提言する機会もいただいている。今回の離島振興法では、離島振興計画の作成にあたり「住民の意見を反映させるための必要な措置を実施」することが明記されたが、全国の離島では一部離島（離島地域で一つの自治体を形成している場合を全域離島と呼ぶのに対し、本土側を含む自治体の中の一部に離島地域がある場合を指す）も多く、住民主体はもちろんのこと、住民の声を聞く仕組みすら持っていない島が多数ある。そういった中で、協議会を設立し、合意形成から事業の実施にいたるまでに取り組んでいる先進的な事例として注目されていることはうれしい限りだ。

その他、今年は栗島での第6回三島交流会の実施（佐渡島、栗島、飛島の三島で、島の自然資源を活かした島づくりを学び合う交流会）、仙山交流味祭 in やまがたへの出展、アイランダー2012（国土交通省、(財)日本離島センター主催、池袋にて開催）への参加と盛りだくさんである。

私たちはこのような「利潤追求目的でもなく、単発的な活動でもない、公益的かつ長期的に内発的・地域づくりの課題に関わろうとする人々、グループ、もしくはネットワーク」のことを、「公益的な民の力」と呼んでいるが、飛島においてその力がようやく目に見える形で、現れ始めたことに島の将来を期待したい。

「しまCafé」において、自由で新たな風が吹く中、島民と来島者、島民と島民の何気ないお茶のみ話から、希望ある島の夢が紡がれていくことを心から祈っている。